

ま と め

多様な倫理的視点の
「網の目」の中で

Overview

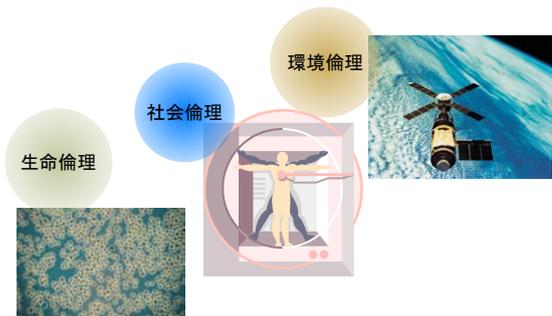
- コスモロジー —— 地球46億年の歴史の中で
- コスモロジーと倫理
- 責任論
- ヴァーチャルとリアルの間

コスモロジー —— 地球46億年の歴史の中で

- 地球誕生から現在までを一日にたとえると・・・
- 生命の誕生は午前4時10分
- 光合成生物が発生したのは9時55分
- ほ乳類の先祖が現れたのは22時48分
- 人類が誕生したのは23時58分

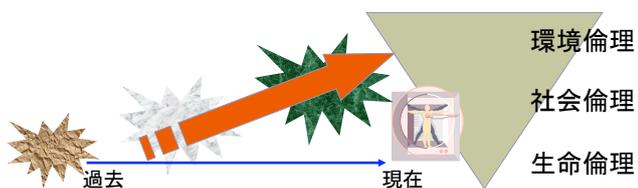


コスモロジーと倫理



コスモロジーの変遷

共時的 (synchronic) 視点から、通時的 (diachronic) 視点へ。



地球中心主義 の終わり

- 地動説革命
- 17世紀、コペルニクス、ガリレオによる。
- 天動説の聖書的根拠：「日よ、とどまれ、ギブオンの上に」（ヨシュア記10:12）。
- ニュートンの万有引力の法則は、天と地を同じ法則によって統一した。





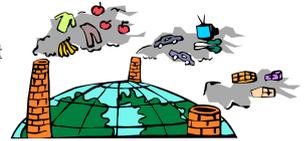
人間中心主義の 終わり (の始まり)

- 進化論革命
 - 19世紀、ダーウィンによる (『種の起源』1859年)
 - ワトソンとクリックによるDNAの二重らせん構造の発見 (1953年)
 - 生物の構造を分子レベルで解明することが可能となってきた。
- 自然の一部に位置づけられた人間
 - 霊長類に対する知識の増大



無限な世界という幻想の終わり

- 地球環境の有限性 (資源・大気) を認識するようになる。
 - 1962年、レイチェル・カーソン『沈黙の春』
 - 1973年、第一次石油ショック
 - 1997年、地球温暖化防止京都会議
 - 2008年、G8北海道洞爺湖サミット
 - 2050年までに世界全体のCO2排出量の少なくとも50%の削減を目指す。
 - 2011年3月11日、東日本大震災



新たなコスモロジーの必要性

- 人類は進歩 (進化) しているのか?
- 「こん棒をやたらとふりまわした洞穴時代の人間にくらべて少しも進歩せず、近代人は化学薬品を雨あられと生命あるものに浴びせかけた。・・・『自然の征服』——これは、人間が得意になって考え出した勝手な文句にすぎない。生物学、哲学のいわゆるネアンデルタール時代にできた言葉だ」 (レイチェル・カーソン『沈黙の春』)。

責任論

- 責任 —— 倫理的行為 (判断) の根拠として。他者への応答可能性。
- 生命倫理と環境倫理の反転関係
 - 生命倫理は「自己決定」を拡大し、環境倫理は「自己決定」を縮小する。
 - 生命倫理は「人格」を縮小し、環境倫理は「人格」を拡大する。
- 「自己決定」による責任の限界
 - 過去の戦争責任
 - 未来世代に対する責任

マトリックス (The Matrix, 1999)



ヴァーチャルとリアルの間

- 情報化社会の倫理的課題
 - バーチャルによって侵食されるリアル (例: 学校生活、ネット依存)
 - 複数の世界を持つことの大切さ (ネット社会は同調圧力が強い)
 - 責任 (リスク) を負うことからの逃避 (匿名性と暴力性)
- ケータイ・スマホ文化が象徴する社会の変容
 - 浮遊する自己をつなぎとめてくれる「つながり」
 - 既存の社会システムに対する抵抗の可能性



テレプレゼンス（ヴァーチャル）への憧憬

- テレプレゼンスとは
 - 日常世界から遠く離れた場所や時間を身体的に経験すること。
- 現代の例：
 - テレフォン、テレビジョン
 - 携帯電話（スマートフォン）
 - バーチャル・リアリティ



テレプレゼンスの起源としての宗教

- テレプレゼンスの起源
 - 日常世界と超越的世界の交流
 - 死者と生者の交流
 - 人間の「こころ」の深層（たましい）との交流
- テレプレゼンスを可能にするバーチャル空間
 - 祭り、教会堂（絵画・アイコンを含む）など



イエスの倫理からのヒント

- イエスによる「神の国」のたとえ
 - 「たとえを用いずには語ることはなかった」（マルコ4:34）
 - 誰にでも理解できる日常的な素材（自然）から構成されていた。
- リアルとバーチャルとの二者択一的な問いを拒絶する
 - 熱心党（政治的な「神の国」：リアル志向）とクムラン教団（超自然的な「神の国」：バーチャル志向）の比較
- リアルとバーチャルの間の往還運動の中で、新しいリアリティ・多様性を紡ぎ出していく。リアルの土台として自然の認識・経験。

無関心との戦い

「愛の対極にあるのは憎しみではない。無関心である。美の対極にあるのは醜さではない。無関心である。知の対極にあるのは無知ではない。それもまた無関心である。平和の対極にあるのは戦争ではない。無関心である。生の対極にあるのは死ではない。無関心、生と死に対する無関心である」（エリ・ヴィーゼルほか）。